

# 丘の公園第7遺跡

OKANOKOUEN No.7 SITE

1994. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

# 序

本報告書は、1993年度に実施した須玉八ヶ岳公園線建設事業に伴う事前の発掘調査の結果をまとめたものであります。

八ヶ岳の東南麓の県有林の中に位置する本遺跡は、三次にわたって行われました分布調査によって発見された遺跡であります。この分布調査は、文化財保存事業として国庫補助を受けて、1983年度から1985年度まで行われました。その結果、従来遺跡の所在はほとんど知られておりませんでしたが、分布調査によって旧石器時代を初めとし、縄文時代から中世までの広範囲にわたって遺跡の存在が知られることとなりました。

中でも丘の公園14番ホール（山梨県教育委員会・山梨県企業局 1985『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』）は、企業局との協議の結果、そのまま保存されております。

今回の調査では、平安時代と考えられる炭焼窯1基が確認され調査がなされました。遺物としては、縄文時代に属する石鎌1点が見つかりました。

末筆となりましたが、ご協力いただきました関係機関各位、並びに直接調査、整理に当られた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 目 次

第1章	発掘調査経過	1
第1節	発掘調査日程	
第2節	調査組織	
第3節	調査方法	
第2章	遺跡の位置と立地	2
第3章	遺構と遺物	4
第1節	包含層出土遺物	
第2節	古代以降の遺構	
第4章	考察	5
第5章	まとめ	9
付録		10

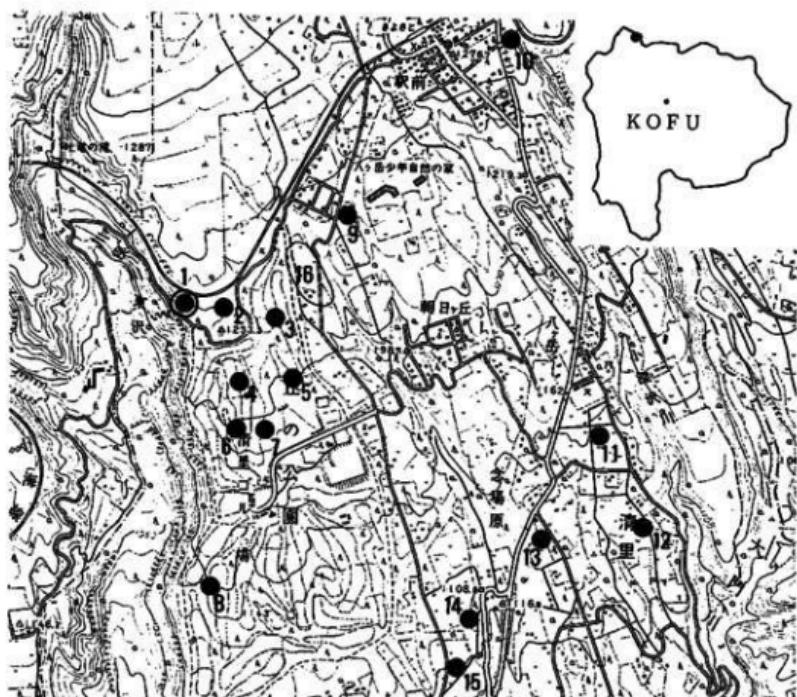
## 例 言

1. 本書は、県道須玉八ヶ岳公園線建設事業に伴って発掘調査された、丘の公園第7遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、山梨県土木部の依頼を受け、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の出土品及び記録は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
4. 文書の執筆は、山本・野代が担当し、文責は文末に明記した。

# 第1章 発掘調査経過

## 第1節 発掘調査日程

- 1993年4月16日 山梨県教育委員会から文化庁長官宛に発掘調査通知を提出
- 1993年4月20日 から 同年 5月24日（14日間） 発掘調査
- 1993年6月1日 から 1994年3月11日 整理・資料分析・報告書



第1図 遺跡位置図 (1 : 25000)

- 1.丘の公園第7遺跡 2.丘の公園第1遺跡 3.丘の公園第6遺跡 4.丘の公園第4遺跡 5.丘の公園第5遺跡  
6.丘の公園第4遺跡 7.丘の公園第3遺跡 8.丘の公園14番ホール遺跡  
9.朝日ヶ丘遺跡A 10.念場原B遺跡 11.念場原F遺跡 12.長原A遺跡 13.念場原E遺跡  
14.念場原D遺跡 15.念場原C遺跡 16.朝日ヶ丘遺跡B

## 第2節 調査組織

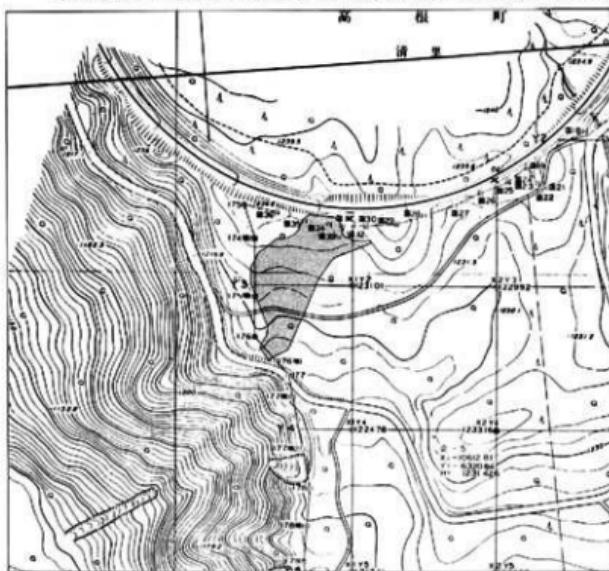
調査主体 山梨県教育委員会  
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター  
調査担当者 山本茂樹・野代幸和  
作業員 津金孝義・津金茂美・重川恵美子・重川ハチ子・堀川ふじ・長田光枝・三井ちあとの・利根川かずこ・利根川富美恵・利根川欣一（敬称省略）  
尚、谷口彰男氏には、調査にあたり多大なるご協力を得ましたことをここで記すとともに厚く御礼申し上げます。

## 第3節 調査方法

調査方法は、旧石器時代から近世に至る遺構の存在を想定して、調査区内約3000m<sup>2</sup>に17本のトレンチの設定を行なった（第3図）。また、遺構が確認された箇所については拡張を行ない、その他の箇所については、疊層まで深掘し、旧石器の有無を確認した。実質調査面積は565m<sup>2</sup>で終了した。  
(山本)

## 第2章 遺跡の位置と立地

本遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町念場原に所在し、本県の北西部八ヶ岳南東麓の念場原の



第2図 調査区設定位置及び地形図（1:4000）

〔スクリーントーン部分は調査区〕

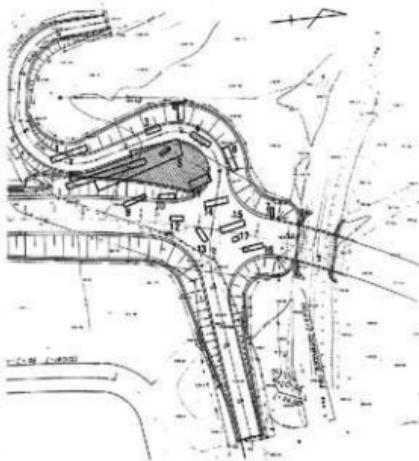
台地上に位置し、標高は1233m前後を測り、西には、川俣川によって約100mの断崖が形成され、北はJR小海線に接している。南東には念場原の台地が南北に大きく広がり、丘の公園第2、3、4遺跡が存在し、東には、旧石器・縄文時代の丘の公園第1遺跡が隣接している（第1図）。

本来この地域は、県有林で、いわゆる恩賜林である。近世には御用林であった。したがって、字切図の中にも字

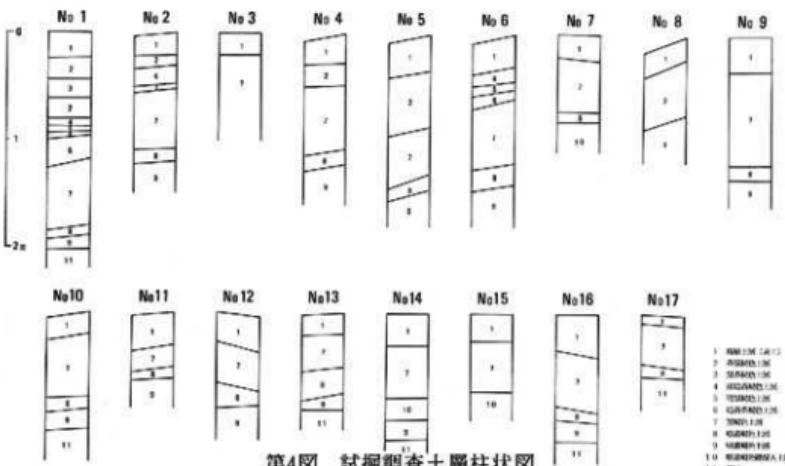
名のない空白の地となっていた。

この念場原は、平安時代の甲斐国三御牧の一つ柏前牧の比定地（磯貝・飯田『山梨県の歴史』1973）であり、『甲斐国志』の記述によれば中世に念場千軒と称され栄えたという。

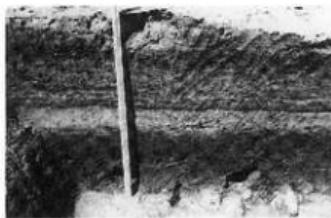
念場原の台地は、緩やかな傾斜をもちらから南へ延び、西側では特に表土から疊層まで厚く堆積しており、川俣川から吹き上げてくる風によって、淡暗黄褐色土層と明黒褐色土層の互層が幅数cmの帯状に堆積している。また、本遺跡の西側では土手状の高まりが形成されており、急激に堆積した風成堆積土層であると考えられている（第2・4・5図）。このような立地に本遺跡は存在している。（山本）



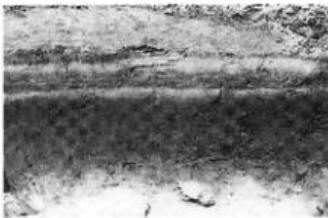
第3図 調査区全体図



第4図 試掘調査土層柱状図



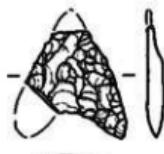
第5図 No. 1 トレンチ 土層断面



第6図 No. 2 トレンチ 土層断面

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 包含層出土遺物



本遺物（第7図）は調査区の南側部分の第2トレンチの黒褐色土中より発見されたものである。これは縄文時代の黒曜石製の石鎌である。先 第7図 石鎌実測図 端部などが欠損しているため、正確な大きさは不明であるが、復元した（S=1/1）長さは2.3cm、幅は2.0cm、厚さは0.3cm、現重量は0.7gを測る。この石鎌は単独で出土したものである。これは遺跡の性格を考える上で重要な資料を提供するに至った。本遺跡周辺に目を向けてみると、丘の公園第5遺跡などの縄文時代の遺跡が多く分布しており、これらの遺跡に伴った狩猟・採集の場として、本遺跡を位置付けることができるかもしれない。（野代）

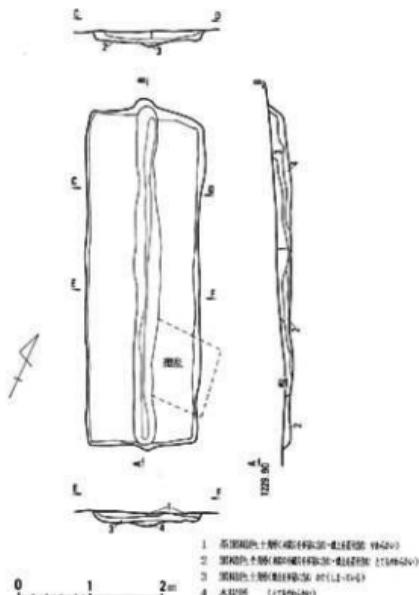
### 第2節 古代以降の遺構

丘の公園第7遺跡から唯一発見された遺構が、ここで報告する炭焼窯跡である。本遺跡は昭和59年の第二次遺跡確認調査によって発見されたものである。本遺跡は、この時のグリッド方式による試掘調査を実施した際、炭焼窯遺構の南側端部が発見され、遺跡指定の契機となったものである。

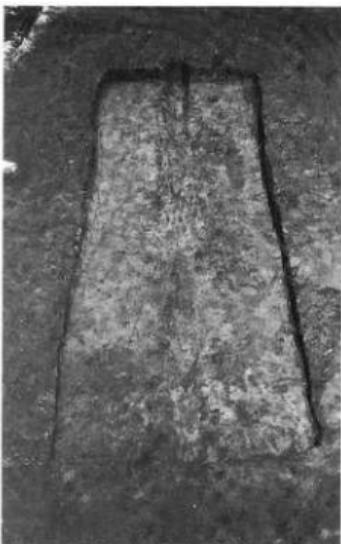
#### 炭焼窯跡（第8・9図）

本遺構は調査区の中央西寄りの第5トレンチ内により発見されたもので、南北方向に穂やかに傾斜する斜面部の標高1250m付近に位置している。遺構は風成堆積土の直下に存在する黒褐色土層中を掘り込んで構築されている。主軸はほぼ南北の傾斜に沿って、北西から南東方向をとる。形態については、隅丸がかった長方形を呈している。また斜面部を利用しているため登り窯状になっている。南北の両端には突出した張り出し部が見られる。遺構内部の中央部分には主軸に沿って溝状の窪みを伴っている。前述の試掘調査段階で、南側部分は試掘調査段階の擾乱を受けている。規模については、長軸が4.80m、短軸が1.60m、遺構確認面からの深さは、平坦部で0.06~0.18m、中央の溝の部分で0.09~0.26mを測ることができる。溝状の窪みについては幅が0.22~0.34m、深さは0.03~0.05mを測る。壁の立ち上がりはやや急である。覆土には多量の炭と焼土を含んでいた。底面でも特に溝付近においてはかなり焼けた跡が見られた。北側部分の煙噴き出し口と考えられる部分では特に焼土が集中していた。南側の焚き付け部分と考えられる張り出し部分からは、焚き付けに用いられたと考えられる草本類が集中していた。

遺物については、木炭以外には全く存在しなかった。 $^{14}\text{C}$ の年代測定からは2940±80といつた結果が出ているが、これは遺構が含まれていたと考えられる年代よりかなり古い値を示しており、参考にならなかった。炭化材についてはコナラ節で占められていた。（野代）



第8図 炭焼窯遺構実測図



第9図 炭焼窯完掘状況

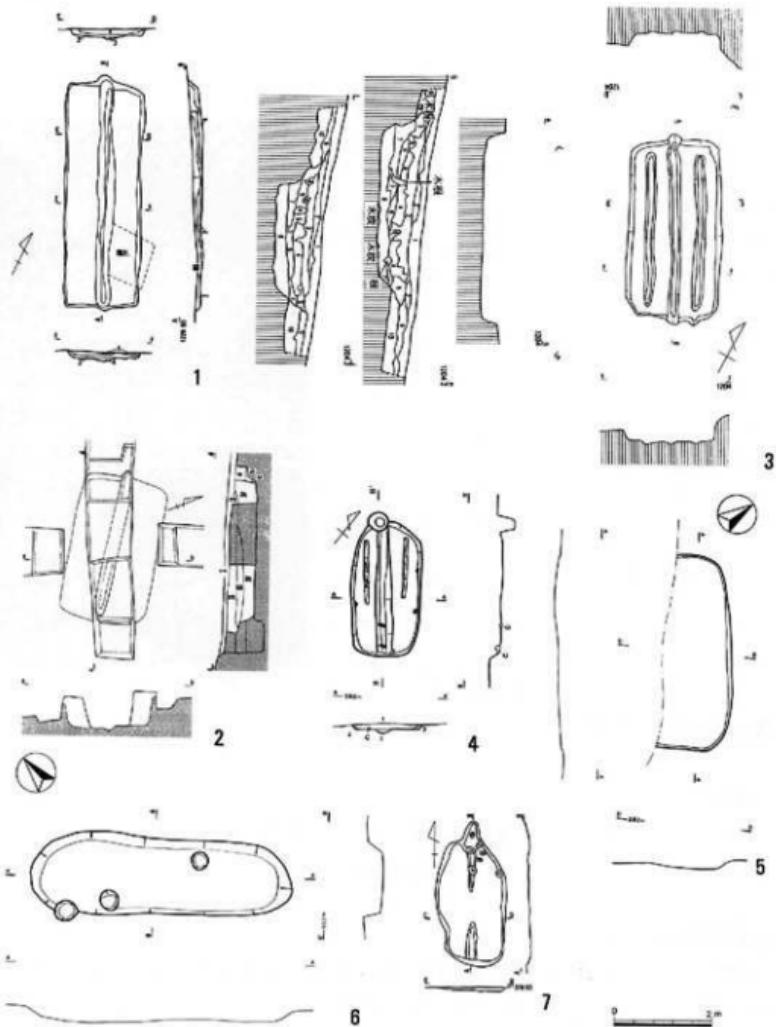
## 第4章 考察

### はじめに

今回、本遺構から発見された炭焼窯遺構について、時代的な背景などをとおして、生産された炭の利用方法や炭焼きが営まれていた当時の歴史的環境について考えてみたい。

### 炭焼窯遺構の研究について

関東近県の炭焼窯遺構に関する研究は、<sup>14</sup>Cなどの年代測定方法を用いた結果、群馬県・埼玉県などでは主に平安期に位置付けられるものが多く、特に埼玉県においては製鉄遺構との関連性が指摘されている<sup>中中中</sup>。また東京都・神奈川県<sup>中</sup>では、近世に位置付けられる炭焼窯遺構が多く報告されている。これらは文献資料等と対比され、主に生活に根ざした用途が考えられている。山梨県における研究は皆無に等しい状況であり、立ち遅れている分野の一つである。本県における木炭生産の起源は不明であるが、平安時代銀治遺構の様相については保坂康夫氏によって、八ヶ岳南麓の北巨摩方面に集中していることが指摘されている<sup>中</sup>。これはさながら現代感覚でいう軽工業地帯を形成していたことを窺わせるものである。このことからも銀治遺構に関連した燃料として、多量の木炭の需要があったことが十分想定され、平安時代



第10図 県内発見の炭焼窯遺構 (S = 1 / 6)

には八ヶ岳一帯を中心に生産されていたことが考えられる事柄である。また炭焼窯が発掘調査によって発見、報告されたもので、古代から中世に位置付けられると考えられるもの（第10図）も、やはり鐵冶遺構の分布と同様に北巨摩方面に集中して発見されていることがわかっている。しかし、これらの炭焼窯から生産された炭の用途を限定することはとても難しい。他県の研究動向と関連遺構、文献の記載など照らし合わせれば、平安時代から中世にかけての主な用途としては鐵冶・鑄物などの工業用や暖房・炊事などの家庭用の燃料として多量に需要があった。

ものと考えられている。

#### 炭焼窯遺構の事例について（第10図）

報告事例としては、4 遺跡 5 遺構が上げられる。

##### 丘の公園第7遺跡（1） 本報告

丘の公園第5遺跡<sup>⑩</sup>（2・3） 北巨摩郡高根町清里地内に所在する。丘の公園第7遺跡の南南東、標高1205mに位置している。総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」のゴルフ場造成事業に伴い、1987年に確認調査、1988年に1100畝程が調査された。調査の結果、縄文時代を主体とする遺物が多く発見された。遺構としては、古代以降に位置付けられる陥し穴と炭焼窯遺構が発見されている。二次にわたる調査の中で炭焼窯は2基発見されている。

炭焼窯遺構の2は、隅丸長方形を呈しており、北西側には突出した張り出し部が見られる。主軸は北西から南東方向をとる。遺構内部の中央部分には主軸に沿って溝状の窪みを伴っている。規模については、長軸が3.10m、短軸が1.60m、溝状の窪みについては幅が0.25～0.30m、確認面からの深さは0.05～0.10m、壁高は推定で0.50mを測る。壁の立ち上がりは急である。3は、隅丸長方形を呈しており、長軸の両端に突出した張り出し部が見られる。主軸は北西から南東方向をとる。遺構内部の底面には、主軸に沿って浅い溝状の窪みが3本平行して走っている。規模については、長軸が3.70m、短軸が1.90m、確認面からの深さは0.70mを測る。壁の立ち上がりは急である。

中尾城址<sup>⑪</sup>（4～6） 北巨摩郡須玉町小倉字中尾地内に所在し、標高590mに位置している。県営圃場整備事業に伴い、1983年に調査が行われた。調査の結果、平安時代の10世紀後半から11世紀代に位置付けられる住居跡、掘立柱遺構と城関係の遺構などと共に、炭焼窯と考えられる遺構が3基発見されている。炭焼窯遺構は、報文中では竪穴遺構と称されている。4は隅丸長方形を呈しており、北辺部分はPitによって切られ、張り出したような形となっている。主軸は北西から南東方向をとる。遺構内部の中央部分には主軸に沿って溝状の窪みを伴っている。規模については、長軸が2.70m、短軸が1.50m、確認面からの深さは0.10～0.13mを測る。溝状の窪みについては最大幅が0.30m、深さは0.20mを測る。壁の立ち上がりはやや急である。5は遺構の半分が擾乱されているが、隅丸長方形を呈しているものと考えられる。主軸は北西から南東方向をとる。規模については、長軸が4.00m、確認面からの深さは0.13mを測る。覆土からの炭の出土は少ないようである。6は長楕円形を呈しており、3基のPitによって切られている。主軸は北西から南東方向をとる。規模については、長軸が5.40m、短軸が1.70m、確認面からの深さは0.17～0.30mを測る。壁の立ち上がりはやや急である。

麻松遺跡<sup>⑫</sup>（7） 北巨摩郡双葉町宇津谷地内に所在し、標高378mに位置している。宇津谷ニュータウン建設事業に伴い、1992・1993年に調査が行われた。調査の結果、縄文時代中期の集落址が発見された。この中で、僅かに古代以降に位置付けられるものと考えられる炭焼窯遺構が一基確認された。炭焼窯遺構は、やや不整がかった隅丸長方形を呈しており、北側には突出した張り出し部が見られる。主軸は南北方向をとる。遺構内部の中央部分には主軸に沿って

溝状の窪みを伴っている。規模については、長軸が2.96m、短軸が1.47m、溝状の窪みについては幅が0.11～0.22m、確認面からの深さは0.04～0.10mを測る。壁の立ち上がりはやや急である。

### まとめ

ここで炭焼窯の特徴と歴史的背景に基づく炭の用途などについて若干の検討を加えてみたい。前述のような事例が確認されているわけであるが、その大部分のものについては隅丸長方形で内部に溝状の窪みを持つものである。このような形態を示すものの起源を求めていくと、弥生時代後期に位置づけられる土器焼成遺構に見ることができ<sup>9</sup>、窯の源流を探る上で注目したい。第10図で示したものは、考古学的な年代を把握する遺物を伴わないので、これらが営まれていた実年代を把握するまでには至らないが、形態的に見た場合、他の遺跡から発見されたものと、本遺跡発見のものはほぼ同時期に営まれていたように思われる。同形態のものを他県に求めた場合、埼玉県の中矢下B遺跡<sup>10</sup>の第2号炭焼窯があげられる。これは伴出遺物や<sup>14</sup>Cの測定年代からも平安時代に位置づけられることが明らかとなっている。このことは本遺跡発見のものが、形態的な共通点から平安時代に属する可能性を示すものと考えられる。

炭化材については、焚きつけ用に竹・松の種子・葉の類が用いられ、木炭には製鉄などに適したクヌギ節などが用いられることが多いようである。本遺跡では焚きつけ用と考えられる草本類（竹？）とコナラ節の炭が認められた。コナラ節については、クヌギ節と共に製鉄燃料材などとして用いられているようである。炭窯の立地条件については、そのほとんどが南向きの斜面部に構築されており、常屋に対して主軸がほぼ平行ないし直行しているようである。また窯床部分は乾燥したやや粘質がかった地面が好まれているようである。これらのこととは大正13年に発行された『木炭と其製造法』<sup>11</sup>で示されている内容とほぼ合致する内容を示していることがわかる。

次に本遺跡周辺の歴史的な背景から用途について目を向けてみることにする。本遺跡の存在する念場原は、平安時代の甲斐国三御牧の一つ柏前牧の比定地（第11図）となっている。周辺には土壘状と空堀状の地形が残されており、これら自然地形を利用した中で牧が営まれていたものと考えられている。よってこれら牧を維持管理するための施設も存在していたものと考えられ、馬銜・轡などを製作・調整する鍛冶・工房施設を伴っていた可能性は多分に考えられる。また前述のような鍛冶遺構の分布も指摘されていることから、平安時代においては、特に鍛冶関係に利用されていた可能性が示唆されるのである。また中世においては、『甲斐國志』<sup>12</sup>の古跡部第十の章に、「…此の原は中世に清次と云う者あり新田を開き人戸を建て繁栄して念場千軒と称せし…」といった記載が見られ、当時かなり栄えていたことが窺える。このことから鍛冶に限らず、各種工業用ないし家庭用として需要があったものと考えができる。中世以降の木炭生産に関する様相は史料との対比を行っていないので不明であり、戦国時代における「おこし炭」「鍛冶炭」などの生産については、今後の課題としたい。しかし須玉町の中尾城址のものについては、戦国時代以降に位置づけられるものが存在するかもしれない。

近世以降では、念場原地内で石窯が数基確認されている。文献によれば北巨摩地方における炭の生産は、大正12年の統計で97,050貫（363,935t）を示しており、かなりの量を近年まで生産していたことが窺える。

このような、炭を大量に需要するようになったと考えられる古代から近年に至るまでの要因と経過が窺える。本遺跡発見のものについては、コナラ節以外のものが認められないことから当時の植生もまた窺い知ることができるだろう。このコナラ節は燃料材に適しており、鍛冶関連に用いられた可能性は十分考えられるものである。年代的には遺構の形態から平安時代に位置づけられるものと考えられ、前述の鍛冶や牧が営まれた時期に当たるものである。このことは、今まで窺い知れなかった本地域の歴史を解明するに当たって、少なからずヒントを与えてくれたものと確信している。

今後も地道に資料を収集し、炭焼窯の分布とその用途について検討していくなければならないと考えている。現段階ではあまりに報告例が少なく、操業時期の特定など曖昧にせざるえない状況にあり、不明な点が山積している。報告例が少ない理由として、炭焼窯そのものが新しいものであると言った先入観によって調査を行わなかった例や、掘り込みが浅いため表土の削除段階で破壊してしまった可能性も示唆される点が考えられる。地元の工業生産の足跡を辿る上で欠かせない資料となるべくものであるので、今後運良く調査の機会を得た際には慎重に調査に当たって頂ければ幸いである。また末筆ではありますが、類例等ご存じの方はご教授願えれば幸いです。

註

- 1) 埼玉県教育委員会「大山」(埼玉県道跡発掘調査報告書第23集、1979)
- 2) 埼玉県教育委員会「甘利山」(埼玉県道跡発掘調査報告書第30集、1980)
- 3) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「台所跡(Ⅱ)」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集、1984)
- 4) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「中山下・日ノ沢・山原鉢・芝ロカ・御山北谷・鹿尾塚」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第51集、1986)
- 5) 世田谷区教育委員会「小幡山」(1979)
- 6) 埼玉県都理藏文化財センター「多摩ニュータウン遺跡-昭和57年 東2分面・第3分面」(1983)
- 7) 埼玉県都理藏文化財センター「多摩ニュータウン遺跡-昭和58年 東2分面」(1984)
- 8) 石川田「復讐再燃された疫病魔の基礎的研究-多摩丘陵における近世及び近・現代の疫病事例から-」(『世界文化』45、1991)
- 9) 保坂義夫「『山廬』の平安時代鍛冶技術の様相」(『山廬開拓考古学協会誌』第5号、山梨古学研究会、1990)
- 10) 山梨県埋蔵文化財センター「山の公園第2遺跡・丘の公園地内埋蔵物調査(第2次)」(報告書) (『山廬開拓考古学センター調査報告書第46集、1989)
- 11) 山梨県教育委員会「山の公園第5遺跡」(『山廬開拓考古学財センター調査報告書第55集、1990)
- 12) 駒沢町教育委員会「甲斐城・駒澤道跡」(駒沢町埋蔵文化財調査報告書第2集、1984)
- 13) 石塚信氏の教訓による
- 14) 山梨県教育委員会「駒山北遺跡(1~3次)」(山廬開拓考古学財センター調査報告書第79集、1993)
- 15) 訂正と同じ
- 16) 訂正より抜粋、秋田山林倉庫編『木炭と其製法』(1924)
- 17) 「甲斐國史」四十七巻、古跡篇第十

## 第5章 まとめ

今回の調査で発見された遺構は平安時代と考えられる炭焼窯が1基のみであり、極めて希薄な遺構の分布状況が明らかとなった。これに関する時代的な背景、形態、類例などについて前章で述べたとおりであるが、文献に認められる本地域での生活の痕跡を明らかにするには、極めて不完全な形での成果しか得られなかった。このことについて考古学的に解明するにあたっては、このような地道な調査とその進展にかかるおり、今後に期待することは大きい。(野代)



第11図 甲斐国の御牧位置図

(山廬開拓考古博物館1987「古代官道と甲斐の文化」より転載)

# 付 編

## 木炭の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

丘の公園第7遺跡（北巨摩郡高根町清里所在）は、川俣川左岸の台地西端部に位置する。台地は、低位I段丘面に相当する火山麓扇状地で、その堆積物は火山礫や火山砂等で構成される（河内、1997；八ヶ岳団体研究グループ、1988）。

本遺跡では、古代以降と考えられる炭焼き遺構が検出され、内部からは製炭したと考えられる炭化材が検出された。遺構の形態は、埼玉県の中矢下遺構等で確認された炭焼窯と酷似していることから、平安時代に属するものと考えられている。また、内部から検出された炭化材は、製鉄のために製炭された可能性が指摘されている。

今回の分析調査では、炭焼き遺構から検出された炭化材について樹種同定を行い、その時代と樹種を明らかにすることと、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定を行った。

### 1. 試 料

試料は、炭化材片および土壌混じり細粒の炭化物等が8袋である。各試料袋間の区別はなく、炭焼遺構から採集した一括試料である。作業の便宜上8袋にNo.1～No.8の試料番号を付け、樹種同定試料の選択を行った。同定可能な炭化材を各試料袋（No.2～No.8）を対象に計12点を抽出し、残りのもの（No.1）から<sup>14</sup>C年代測定試料1点を選択した。No.1とNo.3は細粒の炭化物が主体であった。

### 2. 方 法

#### (1) 樹種同定

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

#### (2) <sup>14</sup>C年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

### 3. 結 果

#### (1) 樹種同定

12点の試料は、No.3が草本類に同定された以外は、全てコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種であった（表1）。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は、「原色日本植物図鑑 木本編〈II〉」（北村・村田、1979）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第2巻」（平井、1979）も参考にした。

表1 樹種同定結果

番号	検出遺構	時代	樹種名
No 2	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 3	炭焼き遺構	平安時代?	草本類
No 3	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 3	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 4	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 5	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 5	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 6	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 7	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 7	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 7	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
No 8	炭焼き遺構	平安時代?	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔隙部は1~2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は、重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。

#### ・草本類

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱をもつ。

#### (2) $^{14}\text{C}$ 年代測定

測定結果を以下に示す。

試料	性質	年代値	Code No.
No 1	細粒炭化物	$2940 \pm 80$ y.B.P.	Gak-17331

今回の結果では、年代値と炭焼遺構の年代とは調和しなかった。断定できる原因是不明だが、より古い炭素が土壤中や外部から混入し、その程度が大きかったのかもしれない。いずれにせよ現在に至るまでの保存事情によるものと考えられる。

#### 4. 考察

##### (1) 木炭の樹種について

木炭の樹種は、草本類1点を除いて、全てコナラ節に同定された。コナラ節の木材は、薪炭材として優良で、現在でも燃料材として広く使用される。遺跡からの出土例は、燃料材や住居構築材を中心に数多くあり、山梨県内でも堂の前遺跡や身洗沢遺跡で柱材等の住居構築材に同定されている。(高橋, 1987; 千野, 1991)。

製鉄の燃料材については、関東地方周辺地域で数多くの樹種同定が行われている。その樹種を見ると、多くはクヌギ節で占められ、コナラ節やコナラ属アカガシ亜属も使用されている(例えば、千野, 1983; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1984, 1990; 山内, 1979, 1985a, 1985b; 嶋倉, 1990等)。これらの結果から、本遺構で製炭された木炭が、指摘されているように製鉄に使用された可能性がある。また、草本類は、炭焼きの際の火つけ材の可能性がある。

今回調査を行った炭焼き遺構は、埼玉県中矢下遺跡の炭焼窯と形態的に酷似することが指摘されている。中矢下遺跡でも炭焼窯から検出された炭化材の樹種同定が行われているが、その結果はコナラ節3点、クリおよびカキノキが各2点、アカガシ亜属および広葉樹(散孔材)が各1点であった(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1986)。中矢下遺跡の例は、樹種が複数になる点で、今回の結果とは異なる。このような違いは、周辺植生や使用目的が異なることに起因する可能性もある。一方、これらの炭化材は、木炭が取り上げられた後に遺構内に残存したものの可能性があり、樹種同定結果が製炭された木炭の樹種構成を正確に反映しているとは限らない。そのため、今回の結果から中矢下遺跡の炭焼き窯と樹種構成が異なるか否かは判断できない。

このような炭化材の調査を行う際には、遺構内から検出される炭化材について、可能な限り多数の樹種同定を行うことが必要である。また、本地域では、過去に製鉄燃料材に関する検討が行われていないため、今後さらに類例の蓄積が必要である。

##### 〈引用文献〉

- 平井信二(1979)木の事典 第2巻. かなえ書房.  
河内晋平(1977)ハケ岳地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図). 92p., 地質調査所.  
北村四郎・村田源(1979)原色日本植物図鑑 木本編(II). 545P., 保育社.  
パリノ・サーヴェイ株式会社(1984)台耕地遺跡試料樹種同定報告. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書-XIX-台耕地(II)」P.308. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団.  
パリノ・サーヴェイ株式会社(1986)中矢下遺跡出土試料 材同定報告. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第57集「中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・淹尾塚住宅・都市整備公團 飯能南台地区埋蔵文化財発掘調査報告書」P.172-174. 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団.  
パリノ・サーヴェイ株式会社(1990)栗田かなくそ山遺跡出土炭化木同定報告. 新治郡千代田村文化財・高倉・栗田地区埋文第1次調査報告「栗田かなくそ山遺跡遺跡調査報告」P.41-42. 新治郡千代田村教育委員会・高倉・栗田地区埋蔵文化財発掘調査会.  
嶋倉巳三朗(1990)武井地区製鉄遺跡群出土炭化木の樹種調査. 福島県文化財調査報告書

第215集「相馬開発闘争遺跡調査報告 I」 P. 299-356、福島県教育委員会・財福島県文化センター・地域振興整備公団

高橋利彦（1987）炭化材について、「山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 P. 56-60、韮崎市教育委員会・岐北土地改良事務所。

千野裕道（1983）有馬条里遺跡 2号製鉄炉より発見された木炭群の樹種について、渋川市発掘調査報告書第7集「有馬条里遺跡 沖田地区 第2分冊 平安時代」 P. 280、群馬県渋川市教育委員会。

千野裕道（1991）身洗沢遺跡出土木製品の樹種について、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、7、P. 33-39。

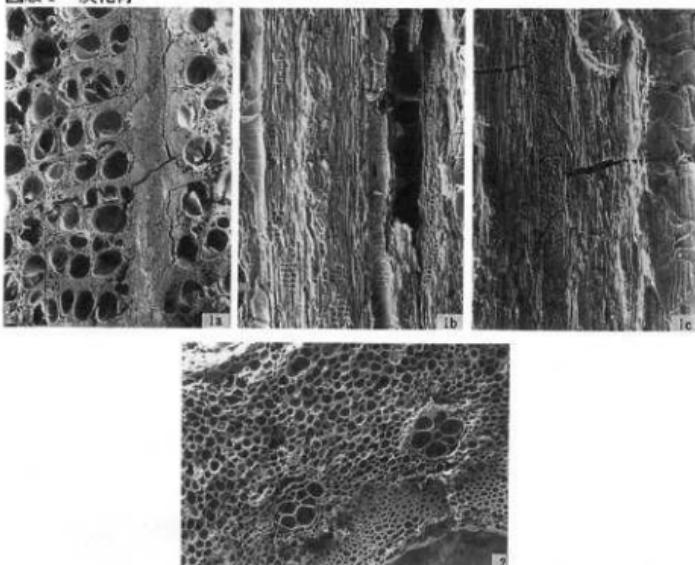
山内 文（1979）木炭の分析、埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集「埼玉県立がんセンター地区埋蔵文化財発掘調査報告書 大山」 P. 305-306、埼玉県教育委員会

山内 文（1985a）埼玉県猿貝北遺跡の木炭鑑定、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第52集「猿貝北・道上・新町口 国道298号線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—I—」 P. 15-3、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団。

山内 文（1985b）三番耕地遺跡の炭化材、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集「三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—III—」 P. 51-52、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団。

八ヶ岳団体研究グループ（1988）八ヶ岳山麓の上部更新統、地団研専報第34号「八ヶ岳山麓の地質」 P. 91-109。

#### 図版1 炭化材



1.コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（No.4）

2.草本類（No.3）

a : 木口, b : 桨目, c : 板目, 2 : 横断面

200 μm : a, 2

200 μm : b, c



調査区（調査前）南西から



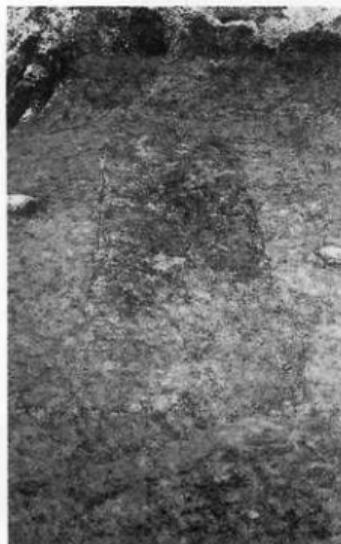
調査区（調査後）南東から



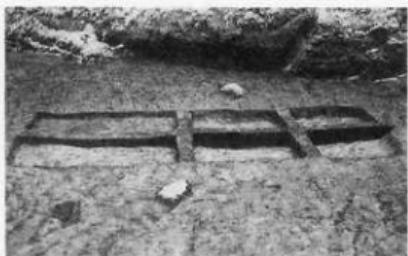
No. 2 トレンチ 調査状況



調査スタッフ



炭焼窯プラン確認状況



炭焼窯南北土層断面



炭焼窯煙吹出し口土層断面

## 丘の公園第7遺跡報告書概要

フリガナ	オカノコウエンダイナナイセキ
書名	丘の公園第7遺跡
副題	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
編著者名	山本茂樹・野代幸和
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話番号	山梨県東八代郡中道町下曾根923・☎0552-66-3881
印刷所	佛峠南堂印刷所
印刷日・発行所	1994年3月22日・1994年3月31日
遺跡所在地	山梨県北巨摩郡高根町念場原3545-3595外
1/25000地図名・位置	谷戸・北緯35°54'19" 東經138°25'43"
主要な時代	縄文・平安時代
主要な遺構	炭焼窯跡
主要な遺物	石器・木炭
特殊遺構	
特殊遺物	
調査期間	1993年4月20日～5月24日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集

## 丘の公園第7遺跡

印刷 1994年3月22日

発行 1994年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 佛峠南堂印刷所

